文京学院大学人間学部研究紀要 Vol.14, pp.95 ～ 109, 2013.3

Ann Hartman によるエコマップの実存論的解釈
ークライエントの存在を基盤にしたよりよい状態の増進を目指してー

田嶋　英行＊

Ann Hartman によって展開されたエコマップは，ソーシャルワークにおける生命線としてのアセスメントにおける主要ツールであり，したがってそれはソーシャルワークのあり方そのものの方向性を決定しかねない，ただの「道具」に留まらない影響力を保持している．ただしこのエコマップは生態学的観点をもとに形成されており，したがってクライエントを他の生物と同様に物在するものとして描き出していく．しかしクライエントは，あくまで実存として存在する．ソーシャルワークはそもそも，クライエントの「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図ることを目的としており，したがってエコマップもクライエントが実存として存在していることを前提に解釈していく必要がある．ここでは，実存として存在する人間を存在論的に分析した実存論的分析論をもとに，この作業をおこなっていく．それにより，エコマップを定義により忠実に解釈することを可能にする．

Key Words : エコマップ，生活モデル，実存論的分析論

Ⅰ．はじめに

ソーシャルワークは現在のところ，以下のように定義されている．すなわち「ソーシャルワーク専門職は，人間の福利（ウェルビーイング）の増進を目指して，社会の変革を進め，人間関係における問題解決を図り，人びとのエンパワーメントと解放を促していく．ソーシャルワークは，人間の行動と社会システムに関する理論を利用して，人びとがその環境と相互に影響し合う接点に介入する．人権と社会正義の原理は，ソーシャルワークの拠り所とする基盤である」（国際ソーシャルワーク学校連盟・国際ソーシャルワーカー連盟 2009：9）と．この定義によ

＊人間学部人間福祉学科

ればソーシャルワークおよびソーシャルワーク専門職は，「人間の福利（ウェルビーイング）の増進」を目指すことになる．なおここでいう「福利」とは，「満足のいく状態，安寧，幸福，福祉などを意味する」（福島 2010：20）．つまり「人間の存在（being）を基盤にしたよりよい状態の増進を目標としている」（田中 2010：5）のである．

さらにソーシャルワークは，クライエントの「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図るため，彼らが「その環境と相互に影響し合う接点に介入する」．ソーシャルワーク専門職は，「望ましい『変化』や『変革』を導き出すために，常に支援の対象者と支援の対象者を取り巻く環境とが接するところへはたらきかけを行い，結果的に支援の対象者や支援の対象者を取り巻く環境の変革を促進する」（福島 2010：25）のである．すなわちその特長は，支援の対象者となるクライエントと彼らを取り巻く環境の双方に，同時に焦点を当てるところにあるのであり，その独自性はまさにこの点にあると考えられる．またこの観点については，ソーシャルワークにおいてはそもそも「状況のなかの人（person in the situation）」と表現されていたが，「エコロジカル・パースペクティブ（生態学的視座）に基づいた」（岩間 2010：81）生態学的アプローチの出現にともなって，「『環境のなかの人』（person in the environment）と表現されるようになった」（同前）．つまりソーシャルワークは，自身とは必ずしも関連のない生態学における基本的視点を導入し，クライエントとその環境の両者に同時に焦点を当てることを可能にした．それによって「個人か社会か」という，いわゆる「振り子」の論争に決着をつけることができるようになった．

Alex Gitterman と Carel Germain によれば「生態学理論は，有機体と環境の相互依存を強調することから，われわれが人と環境という概念をもって歴史的に傾注してきたソーシャルワークの隠喩（metaphor）として，とりわけふさわしいものとなる．この生態学的隠喩は，人びとを援助し，かつ人間が成長し，健康を得，そして社会的に機能することによって満足することを支える応答的な環境の形成を促す，という社会的な目的を専門家が実践していくことを助ける」（Gitterman&Germain 2008：51）という．先の定義においてはソーシャルワークが，クライエントが「その環境と相互に影響し合う接点に介入する」と規定していたが，すなわちそれは生態学における「有機体と環境の相互依存を強調する」観点を積極的に取り入れていったと考えられるのである．

さらにこの生態学の観点を取り入れることによって開発されたのが，すなわち Ann Hartman によるエコマップ（エコロジカルマップ）である．これは「生活空間のなかで暮らしている家族における支えられているという気持ちや緊張，葛藤，さらには満足といったものの源泉（sources）を描き出す」（Hartman 1979：12）ことを可能にする．またこれは，ソーシャルワークの展開過程の 1 つとしてのアセスメント（事前評価）において，重要な役割を果たす道具（ツール）の 1 つとして位置づけられている．ソーシャルワークはそもそも，クライエントの「生活課題」を解決していくために展開されるわけであり，したがってその「課題」を確定していくアセスメントはまさに生命線である．それゆえその主要ツールとしてのエコマップ

は，ソーシャルワークのあり方そのものの方向性を決定しかねないのであり，ただの「道具」に留まらない影響力を保持していると考えられる．

ただしここで問題となってくるのが，クライエント延いては人間が他の有機体一般や無機物とは異なり，実存（Existenz）として存在しているという事実についてである．彼らはあくまで，「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」（茅野 1968：93）するのである．たしかにソーシャルワークは，生態学における基本的視点を導入したことによって，クライエントとその環境の両者に同時に焦点を当てることを可能にした．そしてこのことが，ソーシャルワークの独自性を形成しているということについては，先に述べた通りである．エコマップは，このソーシャルワークにおける生態学的観点を端的に図式化しているのであり，したがって当然のことながら，クライエント自身を他の生物と同じように物在しているものとして描き出していくことになる．

そもそも生態学は自然科学の一領域であり，その対象となる有機体と環境のあり方を規定するのは，あくまで自然科学者である．したがって当然のことながら，それを隠喩とする生態学的なソーシャルワークさらにエコマップにおいては，自然科学者をメタファーとするソーシャルワーク専門職が，クライエントとその環境のあり方を規定していくことになる．しかしながらそもそもクライエントは，他の有機体一般や無機物とは異なり，実存として存在している．したがってその「環境」についても，本来であれば「あくまでも行為主体であるクライエントが認識し，働きかける」（谷口 2003：57）固有のものとして規定していくべきなのである．

本稿では現在のソーシャルワークの実践において，主要なアセスメントの道具として位置づけられているエコマップについて，クライエントが実存として存在しており，かつ彼ら自身がその環境を規定しているということを前提に，改めてその解釈をおこなっていく．それはすなわち，クライエントの存在を基盤にした Hartman によるエコマップの再解釈に他ならないのであり，その作業を通じて，彼ら自身の存在をもとによりよい状態の増進を図るという，定義により忠実な実践を展開していくための道筋を示していく．なおその際には，Martin Heidegger による実存論的分析論（Die existenziale Analytik）をもとに，その作業をおこなっていく．なぜならこの Heidegger こそが，実存として存在する人間（現存在）のあり方の分析を通じて，ものや他者が存在することの意味を追究した人物だからである．人間という存在者がもろもろの事物や他者とともにある，すなわちその環境のなかにあることについて検討するためには，そのあり方について分析した Heidegger による理論枠組みが不可欠なのである．ただしこのことは必ずしも，クライエント延いては人間の存在についての他の論者による解釈の可能性を排除するものではない．なぜなら唯一絶対の「解釈」というものは，そもそも，いついかなる場合においても存在しないからである．筆者が Heidegger による見解を採用するのは，現時点において，クライエント延いては人間の存在のあり方について解釈したものとして最も説得力があるからであり，したがってそれを回避して通ることができないと考えるからである．

なお先行研究についてであるが，これまでソーシャルワークの領域において「実存」という

概念に焦点をあてたものとして，実存主義ソーシャルワーク（existential social work）を挙げることができる．これは 1960 年代から 1970 年代にかけて，おもに北米で展開された援助枠組みであり，その代表的な論者として John Stretch や John Brown らを挙げることができる．またわが国においても，この北米での流れとは別に，三浦賜郎を挙げることができる．ただしこれらにおいてはいずれも，クライエントが実存として存在する，すなわち「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」するがゆえに, 必然的に直面することになるさまざまな「壁」とそれにともなって生じる「苦悩」を強調し，さらにはその「苦悩」をソーシャルワーク専門職との間における「人間的なつながり」によって乗り越えていくことがテーマとなっている．なおこのアウトライン については，それらすべてにおいて必ずしも直接的に言及されているわけではないものの，Karl Jaspers による実存哲学がモチーフになっていると考えられる．

そもそも Jaspers は，実存として存在する人間が突き当らざるを得ない「壁」，すなわち「闘争や悩みなくしては生きえないこと」（Jaspers=1964：233），「不可避的に負目を引受けること」（同前），「死なねばならないこと」（同前）を「限界状況（Grenzsituation）」と表現した．さらに，人間同士の「交わり」を強調している（前掲：61）．たしかにソーシャルワーク専門職は，日々深刻な生活課題を抱えつつ実存しているクライエントと接しているわけであり，Jaspers や延いては先に挙げた実存主義ソーシャルワークの論者が強調する点について，敏感でなくてはならない．したがって，クライエントにおける「限界状況」や「苦悩」への対応を論じる実存主義ソーシャルワークは，「実存」という概念をもとにしたソーシャルワーク研究の 1 つとして，今後さらなる展開が望まれることになる．ただしこの研究はあくまで，実存として存在する実存者としてのクライエントへの対応が焦点となる．一方で本稿は，クライエントが実存として存在することをもとにその環境について改めて検討し，さらには彼らが「その環境と相互に影響し合う接点に介入する」ソーシャルワークのあり方そのものを見直していこうとする意図をもっている．それゆえたしかに, 同様に「実存」という概念を基軸に論を進めてはいくものの，一連の実存主義ソーシャルワークとは，明らかに次元の異なったソーシャルワーク研究の 1 つとして位置づけられることになる．したがって本稿の内容についての先行研究は現在，存在していない．

Ⅱ．エコマップとは何か

エコマップは前述の通り, Hartman によって開発されたアセスメントの道具（ツール）である．ここでは彼女自身による論文（Hartman 1978）をもとに，概要について述べる．

Hartman によればエコマップは，「家族と世界の間における重要な，互いにいたわり合うつながりや，葛藤のあるつながりを描き出す」（ibid：467）ことを可能にし，さらに「資源の流れ（flow）やその欠如および欠損を明示する」（ibid）ことを可能にするという．つまりそれは，クライエントとその家族の日常生活の営みを，生態学における有機体とその環境との関わりに

なぞらえ説明していくことによって，端的かつ視覚的に把握できるようにしていくのであり，その生活のあり方を「研究の対象とするため孤立した実在物（isolated entity）として捉えるのではなく，むしろそれを複雑な生態系の一部」（ibid）として捉えていく．具体的には，以下のように記述していくことになる（ibid：467 - 469）．

まず家族の世帯の現状を，マップの中央に描かれた円のなかに書く．その関係性については，伝統的な家系図（family tree）や（家族の）起源について表された図（genetic chart）によって表していく．さらにそのうえで，家族とそれを取り巻くさまざまな要素（職場，学校，友人など）との間におけるつながり（connection）を記述する．そのつながりが重要でかつ強固なものであれば，太くしっかりとした線を記す．一方でそれが弱いものであれば，点線を記入していく．さらにそれがストレスや葛藤に満ちたものであれば，刻み目のある線（jagged marks across the line）を描いていく．またそれにおける資源やエネルギーもしくは関心の流れの方向性を示すため，矢印を併記する．なおエコマップにおいては，クライエントおよびその家族という要素と，それを取り巻く職場や学校そして友人といった要素をつなぐことによって，日常生活全般をシステムとして捉えていく．そしてそれによって，「さまざまな家族員が世界とどのようにつながっているのか」（ibid：468）を明らかにすることができるようになるのである．

このようにエコマップにおいては，クライエントやその家族とそれを取り巻く環境を要素化し，さらにそれらが実際にどのようにつながっているのかを明記することによって，その日常生活のあり方をシステムとして捉え直していくことになる．なおここでいう要素とは，ものごとを成立させるために不可欠なものことである．ただしそれらをただのものとして規定してしまうことによって，彼らがそもそも実存として存在しており，かつ彼ら自身がその環境を規定しているということを見逃してしまうことになる．エコマップはあくまで，自然科学者をメタファーとするソーシャルワーク専門職が科学的な分析枠組みというフィルターを通して，クライエントとその環境のあり方を規定することによって，初めて描き得るものなのである．

なおエコマップについてはこれまで，ソーシャルワークにおけるさまざまな領域での活用の検討やエコマップそのものの研究がおこなわれてきている（岡本他 1992；湯浅 1992；木原 1994；福本 2002；三毛 2003；新保 2004；久保：2006；大西：2010）．これらにおいては，Hartman が論じた内容をベースに検討がおこなわれており，したがってそれをアセスメントのための「道具（tool）」（Hartman 1978：466）として扱っている．エコマップについては，木原活信が総括しているように，たしかに「そこには特に深淵な思想もなければ，深い理論的な洞察があるわけでもない」（木原 2010：124）ものの，一方でそれは「ソーシャルワークにおける実践の有用性という意味では極めて重要な役割を果たして」(同前)いるのであり，それによって「これまで文章で長々と書いていたクライエントとその複雑な人間模様やその周辺環境が図式化・視覚化され，一目瞭然にわかる」（前掲：126）ようになった．先にも述べたようにそれは，アセスメントというソーシャルワークにおける生命線の主要ツールとなっており，そのあり方そのものの方向性を決定しかねない，ただの「道具」には留まらない影響力を保持してい

ると考えられるのである．

ソーシャルワークにおいてはこれまで「有効性，実用性が最優先され」（岡本 2010：10）てきた．クライエントにとって「有効であれば，いかなる科学でも無差別に節操もなく，ありとあらゆる知見や理論あるいは諸科学の法則や所見を導入・採用・応用して」（前掲：11）きたのである．このエコマップについても，本来ソーシャルワークとは必ずしも関連のない生態学における観点をもとにしており，便利であることからソーシャルワークにおいて多用されるようになったのであるが，それによってクライエント自身を生態学における有機体一般と同様に，システムを構成するものとして描き出してしまうことになった．先に挙げた先行研究においても，たしかにクライエントの主体的側面を強調している場合もあるが，その場合でもやはりシステムを構成する要素の 1 つとしてのみ扱っている．

ソーシャルワークはそもそも，その定義にもあるように，クライエントの「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図るものである．したがってエコマップについても，彼らが実存として存在することを論じた実存論的分析論をもとに解釈していく必要があり，延いてはそれが，定義により忠実な実践を展開するための基盤を形成することになる．なお事例研究についてであるが，もちろんソーシャルワーク研究が実践の学である限り，事例を通じた検討は必要である．ただしそのためには，まずはそれを可能にする理論的基盤を整備しておかなければならない．先に挙げた複数の先行研究が Hartman による論文（Hartman 1978）の内容に準拠しているように，エコマップの実存論的解釈についての事例検討も，何らかの基盤となる見解が必要である．本稿はその役割の一端を担おうとするものであり，したがって事例の検討については他の機会におこなっていく．

Ⅲ．Hartman によるエコマップの実存論的解釈

ここでは実際に Hartman によって描かれたエコマップについて，クライエントが実存として存在しており，かつ彼ら自身がその環境を規定していることを前提にした場合，それをどのように解釈していくことができるのかについて論じていく．前述の通りこの作業は，クライエントの存在を基盤にした Hartman によるエコマップの再解釈に他ならないのであり，その作業を通じて，彼ら自身のよりよい状態の増進を図るという，定義により忠実な実践を展開していくための道筋を示していく．

A.「世界」のなかにあるというあり方

クライエントという存在者は，現在のソーシャルワークが規定している通り，たしかにその環境のなかに存在している．このことは決して揺らぐことのない，厳然たる事実である．あくまで「環境のなかの人」なのである．ただしクライエント延いては人間は，他の有機体一般や無機物とは異なり，実存として存在している．すなわち「自分の存在することへ向かって自分

を関わらせつつ存在」するのである．つまり，自己関係的存在として存在している，ということである．一方で同時に「世界（Welt）」を発見しているのであり，そしてその「世界」はすでに「与えられている」（Heidegger=2003a：189）．クライエント延いては人間が実存として存在すること，さらにはすでに「世界」のなかにあること（「世界＝内＝存在」）は，あくまでアプリオリ，すなわち経験によって得られたものではなく，かえってその経験が成り立つ基礎となる原理として捉えていくべきことなのである．

クライエント延いては人間における「環境」は，さまざまなものと他者によって構成されている．われわれがものに触れることができるのは，われわれが現に存在しており，かつわれわれに対してすでに「世界」が暴露され，さらにこの「世界」からものが接してくる場合だけである（前掲：140‐141）．なおこの「世界」とは，何らかの客体的な存在者（もの）として規定し得る性質のものではないものの，実際には却ってそれがものを「はなはだしく規定」（前掲：189）する．この「世界」は決して，もの（物体）の総和として規定し得るものではないのである．

クライエントを含むわれわれ人間は，この「世界」のなかにあるというあり方において存在しているのであり，「そのつどすでに暴露されている世界において出会われる存在者のもとで存在」（前掲：159）する．Heidegger によれば，そもそもわれわれが道具のような存在者をもつことができるのは，「配慮的な気遣い」（前掲：173）という「交渉」（同前）ができるからである（前掲：178）．

> そのつど道具に合わせて裁断された交渉のうちでのみ，道具は純正におのれの存在においておのれを示すことができるのだが，そうした交渉，たとえば，ハンマーでもって打つことは，この存在者を出来する事物として主題的に捕捉するわけでもなければ，ましてやそれを使用したからといって，道具構造そのものに通暁する知識がえられるわけでもない．ハンマーでもって打つことは，ただたんにハンマーの道具性格に通暁している一つの知識をもっていることではなく，それ以上適切には可能でないようにこの道具を我がものにしたということなのである．そうした使用しつつある交渉においては配慮的な気遣いは，そのときどきの道具にとって構成的な手段性に服従している．

われわれがハンマーのような「道具」と交渉し，それ自体を発見することができるのは，われわれが「世界」のなかにあるというあり方で存在しており，かつ配慮的に気遣うことによって，さまざまな道具と出会うことができるからである．たとえば自宅の壊れている箇所を自分で修理しようとするとき，すなわち「自宅の破損箇所を修理するということへ向かって自分を関わらせつつ存在する」とき，すでにわれわれに暴露されている「世界」から，ハンマーという道具が現れ出てくる（現象する）．その結果として，われわれの「環境」にハンマーという道具が存在するようになるのである．

一方で，クライエントの「環境」を構成するもう 1 つの要素である他者の場合はどうであろうか．Heidegger によれば人間にとって他者は，「事物的に存在しているのでもなければ，道具的に存在しているのでもなく」（前掲：306），人間として「同じように存在している」（同前）．同様に，「世界」のなかにあるというあり方において存在しているのであり，したがって両者における「世界」は，「そのつどすでにつねに，私が他者たちと共に分かちあっている」（前掲：307）のである．それはつまり，他者とともに共有する「共世界」（同前）として規定されることになる．門脇俊介はその具体的な例として，以下のものを挙げている（門脇 2008：98 - 99）．なおその内容は，ある会社における女性社員 W とその同僚の関係性について述べたものである．この女性社員は，職場のなかで「女性らしく生きる」ことをもっとも重視している．彼女は職場のなかで，女性らしく，お茶汲みという仕事を率先しておこなっている．

> お盆を持って男性社員にお茶を持っていこうとしている，女性 W のふるまいをまた考えよう．この W の固有のふるまいのなかには，そのふるまいを成立させるのに欠かせない「他者」が居合わせている．
>
> 彼女が使っているお盆という道具は，お盆を作った製作者を指示するだけではなく，どのような者に合わせてその道具が作られているかという，標準的な使用者への（身体的）指示をも含んでいる．ハエやゴジラには，お盆の標準的使用者になる資格が身体的にそもそも欠けているであろう．またお盆を用いてなされる「湯呑みを運ぶという仕事」は，彼女と仕事場を共有している男性社員という他者 - あるいは一般にお茶を供される他者 - なしには，意味を失う．

ここでの W は，「女性らしく生きる」というあり方に自らを関わらせつつ存在しているのであり，いわば「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」する実存として存在している．同時に彼女は，他者とも出会っている．つまり「お盆」を使用するということ自体において，彼女はそれを製作した他者や自分と同様にそれを使用する他者，さらには男性社員という他者や一般にお茶を供される他者と出会うのである．それはそもそも，彼女自身が「湯呑みを運ぶという仕事」すなわち「女性らしく生きる」というあり方に自分自身を関わらせつつ存在するからこそ，それらの他者が彼女にとって存在することになるのであり，そしてその結果として彼女自身の「環境」に存在することになるのである．彼女自身や「お盆」を製作した他者やそれを使用する他者，さらには男性社員や一般の人びとは「相互共存在という存在様式」（Heidegger=2003a：322）のうちにあるといえるのであり，他者はともに分かち合っている「共世界」において，「顧慮的な気遣い」という「交渉」がおこなわれることによって，互いの存在が開示されるのである．

B. Hartman 自身によるエコマップの提示

Hartman は具体的なエコマップの例として，John と Beth という夫妻と，その家族が置かれている状況をマップ化したものを挙げている（Hartman 1978：470）．このマップによると夫妻には，John，Gwen，そして Joan という 3 人の子どもがおり，さらにその周囲には拡大家族や社会福祉機関，職場，医療機関，教会，裁判所および保護観察官，友人，学校，さらにはレクリエーション機関といった資源が存在している．この夫妻および家族とそれらの周囲にある資源との間には，さまざまなつながりが形成されているのであり，マップ上ではそれが「重要でかつ強固なものであれば，太くしっかりとした線」として，一方で「それが弱いものであれば，点線」として，さらにはそれが「ストレスや葛藤に満ちたものであれば，刻み目のある線」として記述されている．具体的にはたとえば，妻である Beth とその実母との関係性が，以下のように書き表されている（ibid）．

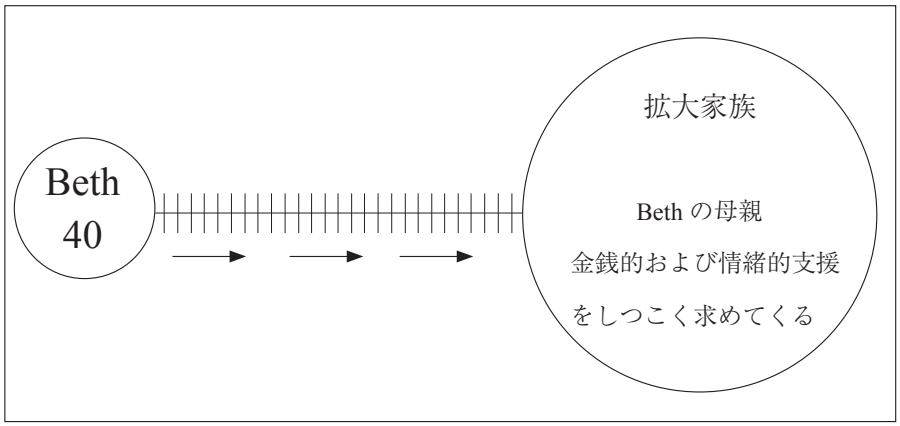

図 1・Beth とその母親の関係性

この図をエコマップの背景にある生態学的な観点にもとづいて説明するならば，ソーシャルワークの焦点は，Beth とその環境を構成する要素の 1 つとしての母親との接触面（interface）に当てられる．マップが図示するところによれば，両者のつながりについては，資源やエネルギーもしくは関心の流れの方向性は，Beth から母親へと向かっているものの，それ自体がストレスや葛藤に満ちたものとなっており，彼女自身に悪影響を及ぼしている．彼女にとって母親は「金銭的および情緒的支援をしつこく求めてくる」ことから，「現実のまたは実際の損害や喪失，もしくは将来の脅威としての損害や喪失」（Gitterman & Germain 2008：60）としての生活ストレッサーとなっており，さらにはそれが「生理学的あるいは情緒的，もしくはそれら両者をともなった」（ibid）ストレスを生み出している．そこでソーシャルワーク専門職は，彼女がその母親を含む環境と「適合（adaptation）」（ibid：55）するよう支援を展開していくのであり，最終的には彼女自身がうまく生きていくことのできる「適所（niche）」（ibid：56）を形成できるようにしていくことになる．

C. 実存論的解釈

それではこの Hartman によって提示されたエコマップを，とりわけ Beth とその母親の関係性について，実存論的に解釈するとどのようになるであろうか．Beth は当然のことながら人間であり，したがって他の有機体一般とは異なり，実存として存在している．すなわち，「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」しているのである．また同時に,「世界」のなかにあるというあり方において存在している．つまり Beth 自身が実存として「自分の親の面倒を看るというあり方に向かって自分を関わらせつつ存在」するからこそ，その「世界」から母親が明け渡されることになる．同時に母親も「子どもに面倒を看てもらうというあり方に向かって自らを関わらせつつ存在」するからこそ，Beth と出会うことできる．両者はともに分かち合っている「共世界」において,「顧慮的な気遣い」という「交渉」をおこなうことによって，互いの存在が開示されることになるのである．もしこれが人間ではない生物同士であったならば，ともに「世界」のなかにあるというあり方にはないので，かりに両者が隣接していたとしても出会うことはない．

マップにおいては，母親が Beth に対して「金銭的および情緒的支援をしつこく求めてくる」ことから，その存在自体が Beth にとっての生活ストレッサーとして，ストレスを感じさせるものとして描かれている．ただしストレスとはそもそも「圧力」を意味する物理学の用語であり, またストレッサーとはこのストレスを引き起こす「刺激」を意味する生理学の用語である．それらはいずれも自然科学の用語であり，ソーシャルワークではこれらを比喩的に転用することによって，クライエントにおける「生理学的および情緒的反応」やそれらを引き起こす「現実のまたは実際の損害や喪失，もしくは将来の脅威としての損害や喪失」を表すものとして用いている．つまり科学という, 存在者の次元における用語によって説明しようとするのである．それではこの事態を実存として存在するクライエントのあり方をもとに，その存在の次元において解釈した場合にはどうなるであろうか．

人間は「世界」のなかにあるというあり方において存在しているが，その「世界」との関わりは「情状性（Befindlichkeit）」,「了解（Verstehen）」，そして「語り（Rede）」という，3 つの等根源的な契機によって成り立っている（Heidegger=2003b：9）．これらのうちまず「情状性」についてであるが，これは人間が一般的な意味で「最も熟知で最も日常的なもの，つまり，気分とか，気分的に規定されている」（前掲:12）ことを言い表している．人間はつねにこの「情状性」へと引き渡されているのであり，それへと投げ入れられている．そして Heidegger はこのことを,「被投性（Geworfenheit）」（前掲：15）という用語を用いて表現している．このように人間は，自身をこの「被投性」のうち置いているのであるが，同時にそれをそのように「了解」している．たとえば「恐れ」という気分のなかにあるひとは，自身がそのようにあり，かつそうでないわけにはいかないものとして「了解」しているのである．そして「恐れ」というあり方，すなわちそのような「気分」に自己を「企投（Entwurf）」（前掲：37）してしまっている．人間は自身が存在している限り「そのつどすでにおのれを企投してしまっており」(前掲:

38），さらに「企投しつつ存在している」（同前）のである．また「語り」については，これまで述べてきた「情状性」や「了解」とともに，等根源的である．なぜなら人間はつねに，自ら「情状性」のうちに身を置いており，かつそのようなものとして「了解」しているが，そもそもこの「了解」自体は人間が語ることによって可能となるからである．

先の Beth の場合，実存として「自分の親の面倒を看るというあり方に向かって自分を関わらせつつ存在」するからこそ，その「世界」から母親が明け渡されることになるのであった．ただしその「世界」との関わり方としては，まずは「不快」という気分において自分を見いだしている．彼女は，母親が「金銭的および情緒的支援をしつこく求めてくる」ことから不快さを感じているのであるが，それは母親という存在者を確認したうえでその結果として「不快」になっているわけではなく，始めから母親を自身の不快さにおいて発見しているのである．そしてそのように感じていることを，そのようにあり，かつそうでないわけにはいかないものとして「了解」している．つまり，そのような「気分」にあることに向かって自らを企投してしまっているのである．さらにこのような彼女のあり方というものは，彼女自身の「語り」がもとになって明らかとなる．母親を「不快」に感じるものとして自らを「了解」することは，彼女が自ら語ることによって明らかになるのであり，そしてそれはソーシャルワーク専門職という他者がその「語り」を聞くことによって可能となる．なぜなら「聞くことは語ることにとって構成的」（前掲：82）だからであり，語ることは聞くことによって構成されるからである．

この状況を生態学的な観点にもとづいて説明するならば，まず Beth の環境に母親という存在者がおり，そして「金銭的および情緒的支援をしつこく求めてくる」ことから彼女にとってストレッサーとなり，さらにそれによって Beth 自身が「生理学的あるいは情緒的，もしくはそれら両者をともなった」ストレスを感じている，ということになる．結果として Beth と母親の関係性は，「ストレスや葛藤に満ちたもの」として規定されることになるのである．ただしこのことはあくまで，自然科学者をメタファーとするソーシャルワーク専門職が，科学的な分析枠組みというフィルターを通して，クライエントとその環境のあり方を規定することによって描き得るものである．したがってこの説明では Beth が実存として，すなわち「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」する事実を見逃してしまうことになる．クライエントの「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図るという，定義により忠実なソーシャルワークを展開していくためには，まずは彼女自身が実存として「自分の親の面倒を看るというあり方に向かって自分を関わらせつつ存在」することによって，彼女の「世界」から母親が明け渡されることになり，同時にそれ自体を自分自身の不快さにおいて発見しているというように解釈していく必要がある．

ソーシャルワーク専門職は，彼女がその母親を含む環境と「適合」するよう支援を展開していくのであり，最終的には彼女自身がうまく生きていくことのできる「適所」を形成していくことになる．Beth と母親の関係性を修復することで，「ストレスや葛藤に満ちたもの」を解消していくためには，母親が不当に「金銭的および情緒的支援をしつこく求めてくる」ことを止

めさせるだけでは不充分である．なぜならその根本的な問題は，母親の行動にあるというよりは，むしろ Beth 自身が実存として「自分の親の面倒を看るというあり方に向かって自分を関わらせつつ存在」すること自体にあるからである．つまりこの Beth 自身のあり方自体が変わらない限り，彼女は母親のことで「不快」な気分にあり続けることになる．なぜなら彼女のあたまのなかには，つねに母親のことがある状態が続くからであり，結果的に彼女は母親の存在に縛られたまま据え置かれることになるからである．

D．相互共存在

クライエント延いては人間は，他の有機体一般や無機物とは異なり，実存として存在している．つまり，「自分の存在することへ向かって自分を関わらせつつ存在」するのである．さらには他者とともに，「相互共存在という存在様式」のうちにあるといえるのであった．門脇は先に挙げた女性 W について，以下のように述べている（門脇 2008：99）．

> さらに重要なことは，「女性らしく生きる」という W の行為や道具連関を方向づけている「主旨」の理解は，文化 C という局所的コンテクストを生き，かつそのコンテクストの型を保持し続けている文化 C の成員としての自己了解だということである．W は彼女一人で，「女性らしく生きる」という主旨を世界に投じているわけではない．その主旨は文化 C の成員に共有された型であり，成員のそれぞれがその型を保持し続けているのでなければ成立しないが，しかし，成員のそれぞれに対しては（限定された）普遍的な規範として，一定の拘束力を発揮する．

Beth は実存として，「自分の親の面倒を看るというあり方に向かって自分を関わらせつつ存在」していた．ただしこの彼女のあり方については，彼女自身がただ一人単独で自己決定した結果として生じたものではない．このことは，彼女自身はもちろん母親や夫，子ども，さらには親族など周囲に存在するひとびとに「共有された型」であり，彼女を含むそれらの人びとにおける「普遍的な規範として，一定の拘束力」をもつ．つまり Beth がこれらの人びとと，「相互共存在」として「共世界」をともに分かち合いながら存在する限り，彼女自身は母親の面倒を看続けなければならないことになり，したがって彼女のあたまのなかにはつねに母親のことがある状態が継続し，結果的に「不快」な気分にあり続ける．

Beth が母親との関係性を修復することで，「ストレスや葛藤」を解消していく，すなわち彼女自身が「不快」な気分に陥ることから解放されるためには，彼女とともに「相互共存在」として「共世界」をともに分かち合いながら存在している人びとが暗黙のうちに共有している「型」や「規範」そのものを，変更していく必要がある．このケースの場合であればそれは，「親の面倒は子どもが看る」という「型」もしくは「規範」である．そこでソーシャルワーク専門職は，Beth や彼女を取り巻く人びととの間に介入する，つまり割り込むことによって，彼女ら

とともに「相互共存在」として，「共世界」をともに分かち合いながら存在することになる．そうすることによりソーシャルワーク専門職が専門職として本来的に備えている価値観，すなわち「個々人が自立（自律）した生活を送ることを尊重する」という価値観が，それまで彼女らが暗黙のうちに共有してきた「型」や「規範」のあり方に変更を迫ることになる．それにより Beth はこれまでとは異なったあり方，つまり他の誰かに過度に依存したり，また依存されたりすることのない「自立（自律）したあり方に向かって自分を関わらせつつ存在」する可能性を追求することが可能になる．結果として彼女は母親との関係性を見直すようになり，「ストレスや葛藤」を解消していく，すなわち彼女自身が「不快」な気分に陥ることから解放される可能性において生きることができるようになる．そしてこれこそが，彼女自身の存在をもとによりよい状態の増進を図るという，ソーシャルワークの定義により忠実な実践を展開していくための道筋である．

ここではこれまで，Hartman によって提示されたエコマップについて，実存論的な解釈をおこなってきた．彼女自身はこれまでみてきた Beth の事例を，あくまでエコマップを例示するために載せており，具体的な援助の展開のあり方について記しているわけではない．ただしこのようにエコマップを実存論的に解釈することによって，それをシステム論的に理解するだけでは明らかできない点について，浮き彫りにすることが可能となる．Beth と母親の関係性は実際に「ストレスや葛藤に満ちたもの」となっており，そのこと自体はエコマップに「刻み目のある線」を記入していくことによって，たしかに一目瞭然となる．さらにここで実存論的に解釈した場合，彼女がそのようにストレスや葛藤を感じるそもそもの原因は，彼女自身が周囲の人びとととともに「相互共存在」として「共世界」をともに分かち合いながら存在しており，かつその間で暗黙のうちに「型」や「規範」を共有していることにある，ということを明らかにすることが可能になるのである．

これまでおこなってきたクライエントやその環境を実存論的に分析するという作業は，他のさまざまなソーシャルワークのアプローチの解釈を可能にする．たとえば「一人ひとりの女性によって生きられている社会的諸現実に焦点をあて，日常の生活世界における個人的な経験を社会的文脈（context）のなかに位置づけて解釈する」（吉田 2000：223）フェミニズムをもとにしたソーシャルワークは，まさに本稿で論じてきた「型」や「規範」から女性を解放するものとして解釈することが可能である．このことについては，筆者における今後の課題としていきたい．

Ⅳ．おわりに

ソーシャルワークの生命線であるアセスメントにおける主要ツールとしてのエコマップは，ソーシャルワークそのものの方向性を決定しかねないのであり，ただの「道具」に留まらない影響力を保持していると考えられるのであった．ソーシャルワークはそもそも，クライエント

の「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図ることを目的としていた．したがってエコマップは，クライエントの存在，すなわち彼らが実存として存在することを基盤に解釈していく必要があるのであり，本稿でこれまでおこなってきた作業こそが，それに該当することになる．

本稿においてこれまで述べてきたことは，必ずしも，システム論の限界性を指摘する意図をもったものではない．ソーシャルワークは，クライエントの「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」を図ることを目的とするのであるが，存在とはそもそも「そのつど，なんらかの存在者の存在」（Heidegger=2003a：27）であり，したがって存在者の次元でクライエントとそれを取り巻く環境について，まずは情報面で視覚的に整理する必要がある．クライエントが実存として存在しており，かつ彼らがそれをもとにその環境を規定しているという存在の次元での解釈は，存在者の次元でのこの整理がシステマティックにおこなわれたのちに，初めて可能となる事柄である．存在者なくして存在はないのである．システム論は存在者の次元に対応する分析枠組みであり，一方の実存論的分析論は存在の次元に対応する理論枠組みである．つまり両者はそもそも次元が異なっているのであり，「守備範囲」が違うのである．クライエントの「存在を基盤にしたよりよい状態の増進」には，それら両者を段階的にかつ複合的に用いていくことが必要となる．エコマップについても，まずは存在者レベルにおいてクライエントとその環境のあり方を図示し，さらにそれをもとに存在レベルにおける解釈をおこなっていくことが求められるのである．

引用文献

福本幹雄（2002）「エコマップを活用したソーシャル・ワークの展開」佛教大学大学院・佛教大学学術委員会大学院紀要編集委員会（編）『佛教大学大学院紀要』30，pp. 227‐243.

福島喜代子（2010）「相談援助の定義と構成要素」社会福祉士養成講座編集委員会（編）『相談援助の基盤と専門職（第 2 版）』中央法規，pp. 19‐41.

Gitterman，A. ＆ Germain，C.（2008）*The Life Model of Social Work Practice*，*Advances in Theory & Practice*，Third edition，Columbia Univ. Press.

Hartman，A.（1978）Diagrammatic Assessment of Family Relationships，*Social Casework*，59（October），pp. 465‐476.

_____（1979）Finding Families：An Ecological Approach to Family Assessment in Adoption，Sage.

Heidegger，M.（1927）*Sein und Zeit*，Max Niemeyer.（=2003a，原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅰ』中央公論新社，2003b，原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅱ』中央公論新社，2003c，原佑・渡邊二郎 訳『存在と時間Ⅲ』中央公論新社.）

岩間伸之（2010）「ソーシャルワークの統合化とジェネラリスト・ソーシャルワーク」社会福祉士養成講座編集委員会（編）『相談援助の基盤と専門職（第 2 版）』中央法規，pp. 77‐82.

Jaspers，K.（1932）*Philosophie 2 Existenzerhellung*，Springer.（=1964，草薙正夫・信田正三 訳『哲学Ⅱ・実存開明』創文社.）

門脇俊介（2008）『「存在と時間」の哲学Ⅰ』産業図書.

茅野良男（1968）『実存主義入門』講談社.

木原活信（1994）「児童面接にエコマップを活用した事例研究」日本社会福祉実践理論学会（編）『日

本社会福祉実践理論学会研究紀要』2，pp. 92‐105.
_____（2010）「実践の科学化‐マッピング・プラクティスの活用」岡本民夫・平塚良子（編）『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房，pp. 117‐126.
国際ソーシャルワーク学校連盟･国際ソーシャルワーカー連盟（2009）『ソーシャルワークの定義　ソーシャルワークの倫理：原理についての表明　ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準』相川書房.
久保美紀（2006）「事例研究（5）エコマップにおける人と環境の関係の質を読み解く試み‐エコマップ評価枠組みとその事例への適用」ソーシャルワーク研究所（編）『ソーシャルワーク研究』32（3）相川書房，pp. 230‐237.
三毛美予子（2003）「エコマップを活用した重度障害者の地域生活支援の方法‐青葉園の場合‐」甲南女子大学図書委員会（編）『甲南女子大学研究紀要．人間科学編』40，pp. 81‐92.
岡本民夫・奥田いさよ・平塚良子・牧洋子・南本宜子（1992）「老人福祉サービスにおける事前評価とエコマップ‐ソーシャルワーク実践図式化表示の試み‐」ソーシャルワーク研究所（編）『ソーシャルワーク研究』18（3），相川書房，pp. 174‐180.
岡本民夫（2010）「新しいソーシャルワークの展開」岡本民夫･平塚良子（編）『新しいソーシャルワークの展開』ミネルヴァ書房，pp. 2‐27.
大西良（2010）「不登校事例におけるソーシャルワークの実践‐エコマップを用いた役割評価を中心に‐」日本学校ソーシャルワーク学会研究誌編集委員会（編）『学校ソーシャルワーク研究』5，pp. 55‐67.
新保祐光（2004）「エコマップ効果的活用のための改善試案：表記編（その 1）関係を示す線の主体的側面と客体的側面双方からの二重線による表記」東洋大学大学院（編）『東洋大学大学院紀要』41，pp. 211‐228.
田中尚（2010）「相談援助における対象の理解」社会福祉士養成講座編集委員会（編）『相談援助の理論と方法Ⅱ（第 2 版）』中央法規，pp. 1-19.
谷口泰史（2003）『エコロジカル・ソーシャルワークの理論と実践』ミネルヴァ書房.
吉田恭子（2000）「フェミニズム理論とソーシャルワーク」加茂陽（編）『ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために』世界思想社，pp. 219‐239.
湯浅典人（1992）「エコマップの概要とその活用‐ソーシャルワーク実践における生態学・システム論的視点‐」日本社会福祉学会（編）『社会福祉学』33（1），pp. 119‐143.

（2012.9.10 受稿，2012.10.22 受理）